

辺境「在家」の成立とその性格をめぐって：特に南九州を中心として

著者	村川 幸三郎
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	17
ページ	63-76
発行年	1965-03-21
URL	http://hdl.handle.net/10114/11103

辺境「在家」の成立とその性格をめぐる

——特に南九州を中心として——

村 川 幸 三 郎

はじめに

中世的土地所有の成立をめぐる在地領主制の基礎構造の検討とは、いうまでもなく、封建的土地所有Ⅱ農奴制形成過程の考察を意味している。しかもこのことは、畿内・近国の名および辺境の在家の性格をその研究対象にしていることも周知の事実である。

ところで、右の場合、留意しておかねばならない諸先学の業績の一つに、中世的農民層の性格が領主権に対して二元的性格をもっているということがある。つまり法的にみたる社会構造の中の擬制的農民と経済構造よりみたる階級的農民との二元性の問題がそれである。その膨大なる研究史を有するわが国の中世的社会形成過程における社会経済史的研究の現段階における主要課題の一つは、この二元性の問題を如何に統一的に認識し得るかということにあるともいえよう(1)。

さて、われわれが右の点を考慮しつつ、封建的土地所有成立過程を考える一つのメルクマールは、さきにものべたように、辺

境における中世的社会の小農民(単婚家族ではない)、すなわち「進化」以前の在家住人の隷属性Ⅱ身分と、その土地保有Ⅱ階級とが如何なる関連性のもとに統一的に理解されてきたか、そしてその関連性が各々の歴史的段階において如何に位置づけられてきたかという点にある。以下、その研究動向をのべて小稿の問題提起を明らかにしたい。

辺境在家の成立に関するその歴史的規格規定の上で、学会における本格的論争の場は、石母田正氏と永原慶二氏にはじまり、両氏をもつておわっているといえよう。すなわちその展開は、まず名の研究についての基本的文献とされる石母田氏の「中世的土地所有権の成立について」(2)の批判からはじめられた永原氏の「『在家』の歴史的性格とその進化」(3)に対して石母田氏が答えるという形で(4)、在家農氏とは「個別的奴隷に系譜をもつコロヌスカ、農奴か」というようにおこなわれたのである。つまり石母田氏は「永原氏の説にもかかわらず、在家農氏はその『本質』においては農奴であるという見解をすてることができず、それを

辺境「在家」の成立とその性格をめぐる(村川)

農奴制の最初の段階であるとかんがえる」(5)として、永原氏の欠陥をつぎのように指摘する。「永原氏の論文においては、現実の利益関係、百姓の経営の全体、つまり実体と、その一側面が『在家』として把握される制度との二つの側面が正當に評価されず、両者のあいだにおける乖離と矛盾が最後まで貫かれていない。いいかえれば、田地ときりはなされて把握される在家の面、すなわち百姓の一側面だけが評価されて、いっしょにそれが実体的なものに転化されていく傾向さえある。……それは……在家住民の本質を奴隷であるという考えにもとづくもので」(6)あるとする。またかかる永原氏への批判は、その視角・主張こそ異るとはいえ豊田武(7)、大山喬平(8)、工藤敬一氏(9)等によってもおこなわれ、これらに対してその後の永原氏は、旧来の論旨を謬論として認めつつ、あらたに班田農民↓在家↓農奴のコースを設定し、「在家は農奴制形成の前提となる過渡的経営体の辺境型ともいふべきであろう。それは畿内『名主』や……中間地域の百姓名主とちがって、自立度の極めて低い存在であり、かつ律令制的・總体的奴隷制的支配原理からの解放度の低い存在」(10)であったとし、いわゆる氏の新説「過渡的経営体論」の中に在家を位置づけられたのである。

ところで筆者は、すでに永原氏の新しいコース設定には賛同する旨をのべたことがあるし(11)、また北関東地方の分析を通じて、実際には、氏が一樣に考えられた在家農民の農奴化⇨土地保有関係成立も、各々の歴史的段階において、各々特殊な過程をとりつつ、その新コース設定がいかにされるべきであることも明らかにし

たのであるが(12)、しかし河音能平氏の指摘にもあるように(13)、永原氏の「過渡的経営体論」そのものが、実際的にも、理論的にも存在しうるかどうかは甚だ疑問である。筆者としては、理論的には八世紀以降、社会に内在されつつ展開するところの新しい歴史的生産関係⇨階級関係そのものの一つの帰結点として各々の領主制を考える立場に立っており、その観点より辺境在家の成立をみるので同氏の新説には納得できないのである(14)。

いずれにしてもこの時点で、永原氏は、一步石母田氏に近づいた感があるが、ここで両氏の差異は、在家とは、その歴史的な性格規定をめぐって、「農奴か、班田農民の系譜をもつ農民の農奴化への過渡的経営体か」となっている問題は残されたのである(15)。小稿の目的は、前述の二元性の統一的把握という視角のもとに、右の問題に接近すべく、南九州地方を対象に考察を試みようとするものであり、旧稿(16)の補論ともなるものである。

註(1) この点については、戸田芳実氏の問題提起がある(同

氏「平安時代社会経済史の課題」歴史学研究、二三四号)

(2) 石母田正「古代末期政治史序説」上巻所収

(3) 永原慶二「日本封建制成立過程の研究」所収

(4) 石母田正「領主制の区分と構造について」(同氏前掲書

所収)

(5) 右同、二六〇頁

(6) 右同、二五六頁

(7) 豊田武「初期封建制下の農村」(児玉幸多編『日本社会史の研究』所収)

- (8) 大山喬平「地頭領主制と在家支配」(日本史研究会史料研究部会編『中世社会の基本構造』所収)
- (9) 工藤敬一「辺境における『在家』の成立とその存在形態」(前掲『中世社会の基本構造』所収)
- (10) 永原慶二「農奴制形成史の若干の論点」(同氏前掲書所収、二九九頁)
- (11) 拙稿「辺境『在家』の歴史的性格についての一試論」(『法政史学』一三三号)
- (12) 拙稿「辺境『在家』の進化について」(『日本歴史』一七九号)
- (13) 河音能平「現代における日本封建制研究の課題と方法」(『歴史学研究』二六四号)
- (14) 拙稿「古代における内在的階級関係をめぐって」(『歴史学研究』二九〇号)
- (15) 永原氏の旧説は、同氏の撤回によって事実上消滅したものであるが、実際には、在家コロヌスとして、その奴隸的性格を強調している諸先学もある。例えば、宮川実「太閤検地論」第一部では、「コロヌスの性格の在家」(七一頁)、「コロヌスのな奴婢・在家等の労働力」(七九頁)、「在地領主のもとにコロヌスのな下人・所従・在家等が存在した」(八一頁)、「主家の直営地経営に専ら駆使されるコロヌスのな下人・所従・在家」(八三頁)、「若干のコロヌスのな下人・所従・在家等を使用する家長長制の共同体経営」(八五頁)、「コロヌスのな下人

辺境「在家」の成立とその性格をめぐって(村川)

・所従・在家等が一般に労働力として使用される」(九二頁)等々。ここでは、在家は下人・所従・奴婢と同義的に用いられ、「コロヌスの在家」の大廉売となっている。宮川氏が、その後この論旨を訂正されたとは寡聞にして知らないが、もしそれがあればお許し頂きたい。

(16) 前掲註(1)論文

一、「在家」の成立とその系譜

南九州における島津庄は、平氏の武士、従五位下行(太宰)大監平秀基によって、万寿年中(一〇二四〜八)の開発から宇治関白家(頼家)への寄進にはじまるが、その開発当時は、空闲地の占有・開発・庄園経営がかなり進んだらしい。すなわち開発以前の特色は、まず律令制下、天平二年(七三〇)頃には、「太宰府言、大隅・薩摩両国百姓建国以来未曾班田、其所有田悉是墾田、相承為佃不願改動、若征班田恐多喧訴、於是隋旧不動各令自佃焉」(1)といわれ、やっと延暦一九年(八〇〇)にいたって、「収大隅・薩摩両国百姓墾田、便授口分」(2)けられたにすぎず、以降、開発当時まで、極めて漸進的に土地経営が進行した辺境地方であった(3)。したがって、九世紀における当該地の農民は、自己の保有する墾田系の耕地(班田)と一定の制限を受けた墾田私有地とを経営していたことが考えられるのである。その後、秀基の子孫は、急速にこの地方に広がり、かかる農民を吸収し、土豪として庄園領主化を完了させていく。伊作庄・日置庄平氏等は、いずれもそれとされている。そして文治元年(一一八五)、周

知のように、左兵衛少尉惟宗忠久が島津庄の下司職に補任せられ、以後、短期間のうちに同庄の発展・広大な寄郡の形成によって当該地は確定されていくのである。

石母田氏によれば、この島津庄の急速な発展とは、「郡司や在庁官人が私領主化する過程、いいかえれば国衙→寄郡→本庄への運動の反映」の結果であって、その動向の結節点として「私領主の活動力の増大、それによる国家・荘園との対立の激化、私領主間の矛盾の発展」Ⅱ「保元乱前後からはじまる内乱」をとらえられている(4)。しかも注目されることは、かかる動向は、建久の「図田帳」にみる牛屎院の所領知行状態の分析にもしめされるように、旧権力者である律令制下の郡司に対立する在庁官人・在地領主・名主層との抗争においてはじまり、鎌倉期領主制の展開の基礎がここにかがわれるということである。結局、在地の土地所有の決定が「図田帳」によって法的・公的に確認され、この確認された新しい領主・名主層の基礎に、当然、のちに広範に展開する在家農民の存在が考えられ、石母田氏は、彼らの対土地関係を、「まだ所有の独立の土地占有者として承認されずに」領主・名主層に強く隷属していたものとして、その領主制を奴隸制の遺制をつよくもつ、もつとも古い構造の領主制であるとされている(5)。

ここで問題になるのは、先進地域における名という収取形態と、辺境の在家という収取形態との差異が、何故古代末―鎌倉期において現われるかということである。この点について河音能平氏は、戸田芳実氏が分析された公卿在家賦課の歴史的 성격(6)を基

礎にしつつ、一一世紀以降の在地の動向をつぎのように考えられることによってこの問題にふれている。すなわち農奴主の大経営をおこなう在庁官人Ⅱ領主層は、自己に所属する生産体を所有権として法的・公的に確認・保障させるのみならず、「自己の公的管轄地域内の全ての農民を自己に直接隷属する農奴的農民と全く同じ法的立場におとしいれようとする政治的意志を、権力的に保障するところの機関に転化し、……一般農民の農業生産の基地そのものを権力的暴力的に収奪し、……それ自身として領内在家支配の権利をその具体的内容とするところの独自の封建的『所領』そのものに転化した」のに対して、他のコース、つまり一般農民があくまでも田堵として、自己の保有地を確保しつつ、かかる権力的暴力的な在地領主層に対抗する場合とを考えられたのである(7)。この点は、郡庄の成立という事実を捉えられることによって、一郡全体にわたる支配権が土地支配権にまで高められ、彼らによる惣領制的所領分割支配が、一般農民とは無関係におこなわれることによって、辺境の「在家制」が成立するとされた工藤敬一氏の理解(8)を社会構成史的に一步前進させたものといえよう。しかし河音氏の論旨に全く疑問がないわけではない。というのは、一般農民Ⅱ「平民之百姓」が暴力的な領主層に吸収された場合と、その暴力に対抗した自由民的一般農民Ⅲ「平民之百姓」とにおいて、いくら前者が「独自の封建的『所領』」を形成するとはいえ、基本的には両者を同一位置Ⅱ封建的土地所有成立におくかぎり、階級闘争の歴史的意義がうしなわれるのではなからうかと思われる点である。このことは、石母田氏が在家を基礎

とする領主制を、奴隸制の遺制をつよくもつ、もつとも古い構造の領主制であるとされたことをどのように考えるかということに通じる問題である。

ともかく辺境における在家の成立およびその系譜は、以上によつては理論的に明らかにされたと思うが、しかし在家が在地領主・名主層に組織化され、その経済的基盤となる段階Ⅱ鎌倉期以降におけるその現象形態は、単にかかる班田農民系の自由民的一般農民Ⅱ「平民之百姓」の系譜だけでなかったことは見透されねばならない。すなわち八世紀以降の古代における内在的階級関係の展開の結果^①——実はこの展開の結果、領主制をも生みだすのだが、在地領主・名主層のもとに奴隸的存在として支配・隷属されていた下人・所従の在家住人化の傾向も明らかであるからである。このことは、在家の奴隸的性格を指摘する立場は勿論のこと、従来の諸先学が暗黙のうちに理解しながら、実際には、不明瞭に前述の一般農民Ⅱ「平民之百姓」の在家化コースと混同させていたところである。例えば、永原氏自身も、一つにはこの両者のコースを混同させ、最終的には、その系譜を「個別的奴隸」から「班田農民」に、またその性格を「コロヌス」から「過渡的経営体」へと理論的転化をされたゆえんである。とはいっても筆者はこの個別的隷属民の在家化コースを少しも主要なものとは考えていないが、この両者の在家化コースを峻別することの重要性は、単にその量的度合の問題としてではなく、その両者の相互関係が、結果的には、彼らの性格を規定することになり、同時にその規定づけられた彼らを経済的基盤とする在地領主制の本質が還元

辺境「在家」の成立とその性格をめぐって（村川）

的に明らかにされるという意味で、極めて大切なこととなっていると思うからである。こうした意味では、従来の諸研究は、奴隸的説であろうと農奴的説であろうと、明らかに不備であったといわねばならない。以下、諸先学の業績に導かれつつこの両者の在家化の展開をおこなってみたい。

註(1) 「続日本記」天平二年三月七日条

(2) 「日本後紀逸文」延暦一九年一二月七日条

(3) 当該地の動向については、いくつかの論考がものされているが、ここでは西岡虎之助氏(『庄園史の研究』下巻二、七八三―八一〇頁)に拠っている。

(4) 石母田正「内乱期における薩摩地方の情勢について」

(同氏「古代末期政治史序説」下巻所収、四四九頁)

(5) 右同、五一七―八頁

(6) 戸田芳実「国衙領における名と在家について」(日本史研究会史料研究部会編『中世社会の基本構造』所収)

(7) 河音能平「日本封建国家の成立をめぐる二つの階級」Ⅱ(『日本史研究』六二号、四五―六頁)。尚、この他に氏は、一般農民自身が進んで農奴主的支配原理にとび込んでいくコースをも考えられている。

(8) 工藤敬一「辺境における『在家』の成立とその存在形態」

(前掲『中世社会の基本構造』所収、二一三―九頁)

(9) 拙稿「古代における内在的階級関係をめぐって」(『歴史学研究』二九〇号)

二、「在家」成立の二つのコース

在家の隷属性について、その本質を農奴と規定される石母田氏さえも、「『在家』は夫役および畠作物等を家または家族を単位に賦課するのを特徴としているが、この家または家族を単位とするなかに、みのがすことのできない問題がある。農民家族を単位に、夫役以下の賦課を課することは、百姓名または土地を媒介として賦課する仕方に比較すれば（この場合にも、人身的隷属関係をともなうのは当然であるが）、あきらかに、直接的、人身的な賦課の仕方であり、その点では律令制本来の徭役および調庸の賦課の仕方と共通している」（⁷）とのべて、その古代的性格を一応承認されているのである。にもかかわらず氏が在家の本質を農奴とされる根拠には、在家の経営が一つの独立したウクライドであるとするこゝとによって、これを大前提にして領主・名主層に対する彼らの隷属・依存関係を考えられるところにある（⁸）。しかるにこゝで問題になるのは、氏がその古典的労作において、「東大寺の統制と支配は頭領による柚工の組織と統制すなわち直接的支配であつて、土地を媒介とする支配ではない」ということから「奴隸であるか否かを決定するものは現実の生活形式ではなくして、主家と隷属者との直接的結合関係の社会的歴史的性質でなければならぬ」（³）とする点と、さきの独立したウクライドとしての経営体を考えることとの乖離と矛盾をどのように氏自身考えられているかということである。つまり主家との結合関係の面からみる後者の立場からいえば、領主・名主層の収取体である在家

とは、独立してウクライドであつてもなくとも別に問題にはならないのではなからうかということである。ましてや成立当初「進化」以前の在家の耕地に対する権利Ⅱ事実上の耕地保有権（⁴）を考えると、そこにはかなり問題が残るのではなからうか。

さて、以上のような石母田氏への疑問点を提出しながら、われわれは辺境における実際の在家農民の存在形態を前節にしたがつて考えてみよう。

（A）下人・所従の在家 鎌倉期の辺境において、下人・所従と称せられる隷属民が在家に居住し、在家農民となる形態については、すでに諸先学もその存在について指摘するところであるが、今、系統的に南九州地方の場合を考察していくことにしよう。

肥後国人吉庄は、球磨川の上流、人吉盆地に立地し、鎌倉時代には蓮華王院の所領であつたが、元久二年（一二〇五）には、平家没官領として地頭相良頼の所領となつたところである。相良一族はこの人吉庄をはじめ、その東方の多良木（父頼景）・泉新庄・高橋郷・豊前国成恒名以下肥後国のみならず各地に所領を有した西遷武士団の一員であり（⁵）、永原氏も詳細に報告しておられるところであるが、この相良氏の一族、頼重が自己の支配地Ⅱ高橋郷において、「命蓮分田参町内屯町武段、為頼重之計、居置百姓、令耕作」せしめており、その場合の百姓とは「母尼廿余年耕作来畠仁令居置年来之下人」（⁶）という下人の類であり、また建長四年（一二五二）頃、薩摩国高城郡吉枝名の地頭渋谷重秀（高城氏二代）は、郡司兼吉枝名主伴師永に対抗して、名内に「宛給下人等給田九ヶ所有之」といって、自己の給田の存在を主

張している(7)。さらに寛元元年(一二四三)、肥後国北山井名に土着した「百姓弥藤別当一類四人」とは、実は逃亡した下人で、その帰属をめぐって相良氏一族の間で論争がおこなわれている(8)。こうした下人Ⅱ所従の身分的表現は、領主・名主層によって、しばしば家具・資財・牛馬等所帯の一部とともに併記されていることをみても、石母田氏の論理をまっまでもなく、普通には奴隷の労働力として認識されているのである。例えば、応長二年(一三一二)にいたっても、薩摩国高城郡の弁済使であり、高城郡司であった高城武光氏の所帯には、譜代の「家内資財物並所従下人等」(9)が存在した如くである。

ところで、右の事例のうち、相良氏の「令居置年来之下人」せしめ耕作をおこなわせるということについては永原氏の認めるところであるが、大山喬平氏はこれを否定して、相良氏が自己の所有する家内奴隷を上着させ、田地を結合させて搾取する形態とは考え難い旨をのべておられる(10)。したがって同氏によれば、この「下人」は一般的農民として理解されていると思われる。確かに氏の史料理解は正しいようであるが、しかしそうだからといって、一般的に居置かれる下人・所従の存在は否定することはできないのではなからうか、すなわち頼重の行為は、確かに自己の主張を通すための偽証であったかも知れないが、現実問題として展開していた下人・所従の在家化をこのことは逆にしめしているものとみられるのである。居置くというような支配者側の行為の点よりみると、領主・名主層に対して、非常にその隷属の度合が強いとされることは、在家を収取単位とする場合より、はるかに

辺境「在家」の成立とその性格をめぐって(村川)

内容的に進んでいた筈の均等名の設置(11)によってもこの在家の隷属性は補強されることは当然考えられるのである。この存在は、強力なる人格的支配によっておこなわれるものであり、純粹にみるような形での封建的徭役労働Ⅱ労働地代に達していない場合の隷属民の形態をもつということが特徴的である。その具体的系譜関係は不明だが、例えば北九州の場合だが、若干の疑問はあるとはいえ、永原氏がしめされた大分県速見郡山香村に関する「蘭Ⅱ在家」が、月八〜十八日におよぶ夫役の徴収をうけ、さらにこの夫役に先行する形態としての「領内人数用序時雇用次第也」という賦課の収取関係は、牛馬を使役する場合の「用序次第」と同様、全く無制限な恣意的収奪関係であり、「かかる非契機的な収取者側の一方的・恣意的搾取形態は、それらがなお農民の非自立性を前提とするものであり、『屋敷』住民の地位がきわめて低い、不完全なものでしかないことを示すものである」(12)。したがってこの在家の存在形態は、封建的領主の基礎構造としてはあまりにもその古代的奴隷制的性格の残存として考えられるのであり、また「班田農民の分解にもなつて発生する没落農民を家父長制的隷属民として多数吸収することによって名田の規模を拡大した古代家族に系譜をひく在地領主Ⅱ名主たちにとっては、それらの隷属民が、如何に自立的経営をもちはじめたとはいえ、それは本来自己の所有する奴隷として恣意的な収奪の対象」(13)とならざるを得ない存在であったことがうなづけるのである。農業経営上、それほど比重があったとも思われたいはいえ、家内奴隷としての下人・所従をその系譜とする在家の存在事実やその

性格はほぼ明らかになったと思うが、この下人・所従について、当該地において、もつとも典型的にせしめられる領主制は、大隅國の在庁官人ないしは郡司であつた弥寝（建部）氏の場合であらう。建治二年（一二七六）、弥寝清綱の所帯の一部たる所従は「奴原」と称せられ、一族庶子に分割譲与されたが、実に総計九四人に達している（14）。水上一久氏ものべられているように、この弥寝氏の領主的性格とは、古代の性格の「単なる古代遺制的面だけでなく、中世的な様相が看過せられる」のであるが（15）、しかしこれをもって封建的支配関係、封建的土地所有と保有関係とを対比させる場合、遺制面の強調ではないが、封建以前の形態といわねばならない。このことは本来律令的政治機構の末端たる郡司の地位から発し、鎌倉時代には菱刈（曾木氏）重能との領主的抗争をへて、建仁以降、鎌倉御家人に変質した弥寝氏の領主制を考える上で重要な要因となるであらう。このように鎌倉期に展開する当該地の領主制の基礎には、一つは、かなり広範な規模での下人・所従の存在があり、しかも彼らの在家農民化の事実によつて特徴づけられるのである（16）。このことは、大山氏が人吉庄地頭相良氏の領有する在家が、たんに家屋と園地との統一にすぎず、在家農民は直接的に領主・名主層に対して人格の支配関係を貫徹させていないという点とは、全く逆の結果を導いている（17）。

以上のように、直接人身的な支配・隷属関係を強くうけていると考えられる奴隸的な下人・所従の在家に居置かれる場合の在家農民は、いきおい領主・名主層に対してその隷属の度合は人身的な徭役を中心とした古代的性格にならざるを得ないのである。彼

らを完全に家内奴隸的位置から解放するまでにわが國の辺境における中世的世界は生産力的にも、社会的にも発展しておらず、したがって、この面での在家農民を主張すれば、いきおい律令制下の農民が生産手段としての土地を消失したのちに、私的な在地領主・名主層の家父長制内部で家内奴隸化したのちに、その奴隸的性質を完全に止揚しないままに在家化したものと認識されるのである。つまりかかる在家農民は、耕地に事実上関係しているとはいえ、その耕地の公的保有権者としては結合し得ない存在であり、この点は、北関東においても、一四・五世紀にいたらねば在家農民一般の耕地保有権の客観的・公的承認の時点は到来しなかつたという事実からもうなづけるのである（18）。ここで問題となるのは、こうした隷属民の在家農民化と一般農民の在家農民化とが、どのような相互関係をもつたかということであらう。この点は一般農民Ⅱ「平民之百姓」の在家化の時点におけるその歴史的性格の分析によつて求めることができるように思えるのでつぎにこの点についてふれてみたい。

（B）一般農民の在家 在家の系譜のうち、その現象形態的には、領主・名主層の所帯の一部たる下人・所従の在家農民化に対して、その実体がむしろ負名的性格を有すると考えられる一般農民Ⅱ「平民之百姓」のそれについてみれば、彼らは相対的に前者より自由であり、まだ多分に班田農民の経営姿体を残しているともみられ、また在家役取取という「中世的取取」関係の成立をみることによつて農奴的存在として理解され易い面も有している。しかし辺境の場合、かかる一般農民Ⅱ「平民之百姓」、特に当該地

における彼らの実体は、その生産力の低位性と同時に「孤立農家Ⅱ小村的集落形態」(19)という在地性に規定されており、河音氏がいわれるような、数百人もの農民の結集による農民闘争(20)が結成され得ず、当然、そこには組織的抵抗を規制される農民の弱さがあり、暴力的権力によって吸収される彼らの性格Ⅱ畿内・近国の負名にもなりきれない必然性があるように思えるのである。

当該地において、この面を考察してみれば、寺領にかぎるが史料的には唯一のそれである保延元年(一一三五)の「院主石清水権寺主大法師某下文」(21)が注目される。この下文は、院主石清水権寺が薩摩国五大院所正信に対して、下文をもつて高城東郷・同仲郷・入来院・薩摩郡并宮里郷・阿多郡等にわたる寺領田畠の管理方式についてのべたもので、すでに工藤敬一(22)、阿部猛(23)、永原慶二(24)氏等によって検討されているが、必ずしも諸氏の文意理解は一致していないので、いま全文を掲載して、その点を整理しつつ本旨にふれていきたいと思う。

下 五大院所正信所

可早任下知旨、令政所沙汰、宛下耕作寺領田畠等事
在

高城東郷 同仲郷 入来院

薩摩郡并宮里郷 阿多郡代内

右件田畠等、春時不令知沙汰人、各恣^(マツ)作令耕作、不限秋所勘、有限沙汰等令遁避之事、甚以奇怪事也、^(マツ)於^(マツ)於^(マツ)自今已後者、於院主者、有任替限、於政所者、永代不朽人也、^(マツ)早任下知旨、可令政所正信沙汰、宛下耕作件寺領田畠等也、就中於入来郡者、

辺境「在家」の成立とその性格をめぐって(村川)

有公驗限、雖為坪々、以往之間、全以不令知沙汰人、過來候条、所不輕罪科也、早任下知旨、可令致沙汰之状、令下知了、敢不可違失、故下、

保延元年十月廿五日

院主清水権寺主大法師

まず工藤氏は、「従来院主が行っていた春時の田畠の宛行いを政所が行うことにしている。これは逆にいえば、春に請作者を定め、秋に一定の貢租を徴収するという契約による請作関係が、毎年行われていたことを示すものといえよう」(25)と考えられ、永原氏は、「所領寺田の経営については、必ず春の農作の始めに沙汰人の下知によって、百姓に請作さすべきであつて、恣に耕作させることは年貢遁避のもととなるから許してはならない」(26)とし、ほぼその文意を工藤氏と同様に解釈されている。また阿部氏は、春に請文を提出させることによって、秋の収穫期に所定の地子を取収する請作形式の成立、つまり平安中期以降の私営田経営の解体としてこれをとらえ、あたかも五大院の所領が古代的奴隸制的直接経営から請作経営に移行したものと理解されているのである。これに対して永原氏は、「この史料がとくに重要な意味をもつ所以は、直営方式から請作方式に移行したことを意味するものとしてではなく、むしろ平安後期のこの時期においても、五大院の寺田が一般にはなお請作方式によって経営されようとしていた事実である」(27)と反論されている。筆者もこの場合、永原氏の文意理解を正しいものとするが、特に注目したいのは、かかる五大院の一般的な田畠経営の方式が「恣に耕作させることは年貢

通避のもととなる」という理由のもとに一般農民Ⅱ「平民之百姓」との間に、その請作関係を「毎年行う」としたことである。すなわち、一般農民Ⅱ「平民之百姓」の耕地保有権Ⅱ請作関係が権力者の前にいかに脆弱なものであったかという事実である。このことは彼らの意志とは無関係に、彼らの上に領主権が働いていることを意味し、恣意的な収奪の第一歩が見透されるのである。

ところで工藤氏が、地域差を考えたつ、この請作関係をそのまま先進地域の一世紀の田堵に類推させているが、この点はどうだろうか。確かにこの契約による請作関係は、寺領といえども村井康彦氏が散田請作の分析によってしめされた一色田Ⅱ地子田体制(28)のように、また戸田芳実氏が一世紀中葉の伊賀国衙領関係の史料分析によって明らかにされた負名体制(29)と同様な段階の土地関係に類似するものである(30)。しかるに五大院の有期的請作関係が、その性格上はたして畿内・近国の庄田における一色田の請作関係や公領における負名の請作関係と同視されてよいものであるかどうかは大きな問題であらう。結論的にいって、筆者は形式上の同一性は実態上の同一を意味しないことを強調したい。そしてその差異の根本的要因を地域差が媒介となる生産性の差異として考えたい。戸田氏の負名とは、「律令制下に較べて、国家に対する生産上の自立自営の経営的地位を確立している田堵百姓は、……彼らの計算と責任に基づいて、年々公田の耕営を請う限りにおいて、具体的公民として存在したのである」(31)という田堵百姓であり、また村井氏の地子田体制下の田堵とは、庄園における田堵と領主との関係は地子経営Ⅱ請作という庄園経営方

式によって結ばれるため、田堵は地子弁進という負担を負うことによって隷属関係が領主との間に成立し、人身的な隷属関係を有するわけではないとされているものである。この点は先進地域の田堵・在家という二元的支配関係の面からいうと正しい指摘であらう。しかし三国彰氏のものべられているように、田堵そのものは、領主層に対して強い隷属性をもつとともに、地方の有力な地主的側面を有する存在であったことも留意しなければならない(32)。実際問題として、こうした田堵の性格を在家にあてはめると、領主・名主層の恣意的支配のもとに在家が地主的側面をみせるのは、「入来院内清敷方二牟礼の六郎入道在家」(33)のように「百姓分」田畠耕地をめぐって在家の二重構造がみられるようになってからである。つまりこの現象は当該地にあつては一四世紀以降に属するのである。いずれにせよ、先進地域の田堵百姓の請作Ⅱ有期の保有権は、治田・私領とともに私的所有関係の公的承認を前提とした存在であるのに対して、五大院の一般農民Ⅱ「平民之百姓」は鎌倉期に向つて名ではなく在家化されるのである。したがってその歴史的性格は田堵の場合とは明らかに異っているといわねばなるまい。

結局、領主・名主層の直接的な隷属民としての下人・所従の在家化は勿論のこと、当該地の場合、一般農民Ⅱ「平民之百姓」の在家化の場合でも、その古代的性格実態を否定することはできない存在であつたと思われるのである。しかも彼らをそうした状況に位置づけた客観的条件は、第一に、比較的早期から国家権力の末端に属する郡司等の私的支配関係が暴力的に成立し、田地は大

分部彼らの手中に集積され、法的・公的に一般農民Ⅱ「平民之百姓」の耕地保有権ないしは占有権が一般的には容易に成立しなかったこと、第二には、先進地域にみられるような典型的な共同体的中世村落の発展が阻止される「孤立農家Ⅱ小村的集落形態」であったため、地域的階級闘争の展開にすくなくらず規制されたこと等が考えられる。その結果、私的所有関係の公的承認を前提とするような先進地域の有力な「田堵百姓Ⅱ負名」そのものが、一二世紀以降になっても当該地では、史料上全くみられないし、また在家農民は、一三世紀にいたっても、領主・名主層によって「押取百姓身代」「追出住宅」という非法をうけ、また「宗久称有隠畠咎、追捕百姓太郎男住、押取身代六人」という乱暴が実際におこなわれているのである⁽³⁴⁾。

以上のような諸点を考えると、豊田氏のように封戸・寄人・神人などの在家化⁽³⁵⁾を当該地にあてはめることは勿論のこと、石母田氏が強調されるような班田農民が比較的自由な形で家族とその経営を維持しながら領主・名主層の私的隷屬下に入った場合の比重は、実際には非常にすくなかったと思われるのである。南九州におけるかかる在家農民といえども、その成立当初においては、名主以前の田堵Ⅱ負名にもいたらない限られた耕地の有期的占有権の保持者たるにすぎず、それは在地領主・名主層の家内奴隷的存在たる下人・所従の動向に規制されながら、領主・名主層に組織化され、その収奪の対象となったものといえよう。だからこそ、収奪形態の制度的側面にすぎないとはいえず、史料上在家がしばしば領主・名主層の恣意によって、自己の経営する田畠耕地

辺境「在家」の成立とその性格をめぐる(村川)

がその在家と分離され処分の対象として出現するのである。このことはもはや彼らの関係が身分と階級との統一の把握なくして理解できない存在形態であることを意味しているし、結局先進地域の在家役収取という在家の擬制的性格だけでは辺境の在家は理解できるものではなく、領主・名主層による一般農民の全一的支配Ⅱ一元的支配を基調とする収奪形態以外のものとは認め難いのである。社会経済史上、特に農民の土地保有という面が封建的土地所有関係を規定する上で重要なメルクマールであるとすれば、かかる在家農民とは、いまだに封建的土地所有以前の所有関係において規定されねばならないであろう。そのことは、先進地域における「荘園領主の土地所有Ⅰ名主の土地保有Ⅰ奴隷的小農民の土地耕作事実の重属性」に対して、辺境の「領主・名主層の土地所有Ⅰ在家農民の事実上の土地保有Ⅰ関係の差異として、その特徴的な階級関係において位置づけられることを意味している⁽³⁶⁾」。

辺境における成立期の在家とは農奴への先駆的形態ともみられるが、より正確には農奴への初期的な形態としてではなく、農奴への特殊な過渡的形態と考えた方が妥当であろう。このことから班田農民Ⅱ在家Ⅱ農奴のコースにおける在家の位置づけを認みたい。

註(1) 石母田正「領主制の区分と構造について」(同氏『古代末期政治史序説』上巻所収、二四六頁)

(2) 右同、二五七～八頁

(3) 同氏『増補中世的世界の形成』五三～四頁

(4) 拙稿「辺境「在家」の歴史的 성격についての一試論」(『法政史学』一三三号)および「辺境「在家」の進化につ

いて」(『日本歴史』一七九号)参照

- (5) 「相良家文書」三号、元久二年七月廿五日附、鎌倉將軍下文

- (6) 右同、一ノ一一号、建長元年七月一三日附、関東下知状

- (7) 「入来文書」一六三号、建長四年六月廿日附、関東裁許状案

- (8) 「相良家文書」一ノ五号、寛元元年一二月廿三日附、関東下知状

- (9) 「入来文書」二二七号、応長二年六月一七日附、武光法忍兼師同日一筆讓状

- (10) 大山喬平「地頭領主制と在家支配」(日本史研究会史料研究部会編『中世社会の基本構造』所収、一二九頁)

- (11) 渡辺澄夫氏(『畿内庄園の基礎構造』)が指摘された均等名の意義とは、過大な夫役収取を徴発するために権力によつて新たに設置されたという点にあるが、この均等名の歴史的位置づけとは、単純に古代的性格を意味するものとはいえないとしても、彼らの存在が、居置かれる下人・所従の実態を考える上である一定の意味を補強してくれる。

- (12) 「長野家文書」、文保五年八月一日附、(『大分県史料』一一所収)。尚、本文は永原慶二「『在家』の歴史的性格とその進化」(同氏『日本封建制成立過程の研究』所収、二四九頁)に拠った。

- (13) 右同掲書同頁

- (14) 「平姓弥寝氏正統文獻」卷三、建治二年正月廿日附、所

従抄帳、(『岩崎文庫』所収)。尚、本文は水上一久「中世讓状に現われたる所従について」(『史学雑誌』六四ノ七号)に拠った。

- (15) 右同掲論文六頁

- (16) このような領主・名主層にじかに隷属する下人・所従の在家化とは別に、家父長的な在家の内部に隷属する小農民Ⅱ名子・下人等の在家化も当然考察の対象とならねばならないが、それは在家の進化あるいは分解の時点で問われねばならないので、ここでは特にふれないが、昨年度春季法政大学史学会例会発表において大橋寛子氏がこの点について独自の問題として展開されている(「南九州における農民の性格と歴史的段階について」と題し、その要旨「法政史学」一六号に所載されている)。

- (17) 前掲註(10)論文、ここで大山氏が説かれている在家とは、下人・所従のそれではなく、むしろ畿内・近国の寄人としての在家なのである。

- (18) 前掲註(4)「日本歴史」一七九号論文

- (19) 永原慶二氏(「中世村落的構造と領主制」稲垣泰彦・永原慶二編『中世の社会と経済』所収)は、現地調査によつて、当該地が小村Ⅱ散居型村落であつて、在家Ⅱ箇の農民の再生産性が地縁的な村落共同体によつておこなわれるのではなく、個々の在地領主制においておこなわれることを明らかにしている。

- (20) 河音能平「日本封建国家の成立をめぐる二つの階級」

II (「日本史研究」六二号)

(21) 「平安遺文」二二三—二二五号

(22) 工藤敬一「辺境における『在家』の成立とその存在形態」(前掲『中世社会の基本構造』所収)。尚、氏はこの

文書は、「薩摩国五大院の院主に政所正信は下文をもつて同国入来院等数郡にわたる寺領田畠等について」のべたものであるといわれるが(二二〇頁)、これは明らかに間違いであらう。五大院は薩摩国高城郡に所在するが、その院主は石清水八幡宮を本家と仰いだ寺院であり、したがって、五大院々主に政所正信が下文を宛てたのではないのである。このことは文書の形式からみても明らかである。

(23) 阿部猛「辺境における封建社会成立の前提」(「北海道学芸大学紀要」一一ノ二号)

(24) 前掲註(19)論文

(25) 工藤敬一氏前掲論文二二〇頁

(26) 永原慶二氏前掲論文一八九頁

(27) 右同、一八八頁

(28) 村井康彦「田堵の存在形態」(「史林」四〇ノ二号)

(29) 戸田芳実「国衙領の名と在家」(前掲『中世社会の基本構造』所収)

(30) 工藤氏はこの点について、「これは寺領の場合であるから、はたしかかる状態が領主的名体制の中でも一般的であったかどうかはなお問題である。しかし、もしそれが一般的状态と認められるならば、村井康彦氏が明らかにされ

辺境「在家」の成立とその性格をめぐって(村川)

た。一一世紀の先進地方で見られる年々の契約による田堵の請作関係と形式的には同様の形態をここに見出し得るわけであり、地域差の問題を考えるについても、非常に興味ある事実といわねばならない」(前掲論文二二〇頁)とのべ、その地域差の問題について、「郡司をはじめ多くの国家権力の末端に連なる者であつただけに、国衙が特に重視した田地は大部分彼等の手に集積され、すくなくとも田地に関する限り、農民の占有権は容易に成立し難かつた」(同二一七頁)と特色づけている。また永原氏もこの請作状態を、「農民の土地保有権の確立がいかに困難であるかを示すものである」(前掲論文一八八頁)とされ、しかもこの関係は寺領経営にかぎらず、一三世紀中葉にいたつても「百姓分」の保有田地とは異なる「うきめん」などに形をかえ存続しているとのべている。両氏にとつては、その研究視角は異るとはいえ、五大院の請作形態をもつて農民の土地保有権の未確定な段階とされているが、その評価はおそらく正しいであらう。

(31) 戸田芳実氏前掲論文一九六頁

(32) 三国彰「『田堵』の側面について」(安田元久編『日本封建制成立の諸前提』所収)

(33) 「入来文書」一一一—一二号

(34) この史料の解釈については、井ヶ田良治氏(「南九州における南北朝内乱の性格」日本史研究一七号)に拠る。

(35) 豊田武「初期封建制下の農村」(児玉幸多編『日本封建

社会史の研究』所収)

(36) 前掲註(4)「法政史学」一三三号論文。尚、この段階では安良城盛昭氏の単婚家族Ⅱ農奴制論に影響されて在家の農奴化とは、最終的には大開検地に求めたが、農奴制とは単婚家族であろうとなかろうと、基本的には小経営の封建的土地所有Ⅱ保有関係成立において指摘すべきであると思われる。

むしろにかえて

律令制の基本的矛盾の展開の結果、一世紀以降、地域的な「荘園制」が発達し、この「荘園制」はさらに地域的差異に規制されて、その内部構造においても差異をもちつつ律令制とは全く異質の関係Ⅱ新しい階級関係を形成させたのである。しかもこの運動の全過程のエネルギーは、基本的には、すでに八世紀以降に存在する不安定な非自立の小経営とその不安定性を自然の制約とともに醸成してきた自給的大経営との内在的階級関係を基礎にする「非アジア化された共同体」関係とその支配者集団Ⅱ古代貴族階級との階級闘争にあった(1)。しかしこの基本的矛盾の展開は、後進地域にあつては、その生産力と地域性の諸条件によってきわめて特定な自給的大経営の家父長制を発達せしめることによって特徴づけられるのである。つまり不安定な非自立の小経営を私的に組織・隷属化することによって、自給的大経営は典型的な農奴主的大経営とは異質の構造をもつ新しい家父長制Ⅱ領主制をつくりだした。しかし注意しなければならないことは、この家父長制Ⅱ領主制は家内奴隷のみならず、一般農民Ⅱ「平民之百姓」

をも奴隷のベクリウムとしてではなく、事実上の田畠園地の保有権者にとどめ、それ自体は一つの独立したウクライドとしての「在家」農民として掌握し、恣意的収取対象として組織化しているということである。したがってどちらかといえば、この家父長制Ⅱ領主制は奴隷の要素の強い現実をもつが、「在家」農民は古代の奴隷そのものとは明らかに異っており、いわば班田農民の分解より私的所有関係成立過程の辺境における過渡的形態として体现化されている存在といえよう。だからこの過渡的形態の在家は、農奴として農民的な「名主」に転換する可能性を、彼らの進化の必然性として内在しているのである(2)。

わが国の封建制Ⅱ農奴制の成立が早くて畿内・近国では平安末―鎌倉期、遅くとも後進地域では鎌倉末―室町期を通じて一般化し、さらに戦国混乱期を経て、段階的には太閤検地を劃期として、全般的に、初めて純粹な意味での統一的封建社会が確立するのであるが、勿論、太閤検地段階においても辺境では分附百姓の存在を特徴として、また当該地では門割制度の展開が問われるように、その経済構造における地域的差異は認めねばならないことはいうまでもない。ともかくわが国の「荘園制」の変質の全過程は、この間の事情をあらさまにするその具体的形態の提示以外のなにものでもないと考えられるのである。

註(1) 拙稿「古代における内在的階級関係をめぐって」(「歴史学研究」二九〇号)

(2) 拙稿「辺境『在家』の進化について」(「日本歴史」一七号)(附記)小稿は昭和三十八年度法政大学史学会大会報告をまとめたものである。